

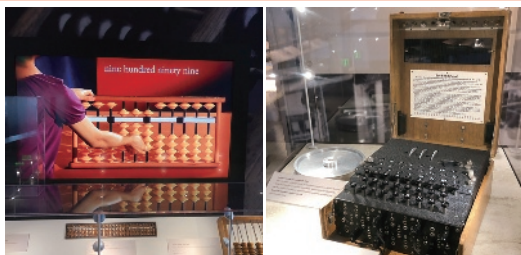
海外研修に行ってきました その2

2020年2月17-22日、全国科学館連携協議会が主催する海外博物館研修に参加する機会をいただきました。アメリカのカリフォルニア州にある4つの科学博物館を訪問し、博物館事情について詳しく伺いながら、それぞれに個性あふれる展示を見学してきました。『うちゅう5月号』に引き続き、魅力的な展示の数々のうち、そのほんの一部をご紹介します。

コンピュータ歴史博物館(マウンテンビュー)

コンピュータ歴史博物館は、グーグルやアップルなど、名だたるIT企業が密集した地域「シリコンバレー」にあります。その名の通り、現代までのコンピュータの歴史を、膨大な実物資料で伝える博物館です。

計算尺などの計算用具に始まり、第2次世界大戦でドイツ軍が使用した超難解暗号器「エニグマ」、そしてスーパーコンピュータ、はたまたTVゲームなど、バラエティに富んだ展示資料でした。日本のそばんも、使い方の解説つきで展示されていたのはびっくりです。たしかに、説明がないと使い方はわかりませんね。



この博物館で特に印象的だったのは、1959年に発表されたIBMのコンピュータ IBM1401の動作実演です。世界中の企業で利用された初期の頃のコンピュータ。たくさんの機械で一室が埋め尽くされています。これ全体で1セットです。コンピュータといっても、メカが動く様子はアナログそのもの。けたたましい音を立てて動くその迫力に鳥肌が立ちました。実演スタッフの2人は、このコンピュータの現役時代に、当時エンジニアや学生としてこれを使って計算されていたとのことです。もし彼らが実演スタッフを引退してしまったら、このコンピュータが動く様子を見ることはできなくなってしまうのでしょうか。生の記憶を伝える人の存在はとて貴重です。

エキスポラトリウム(サンフランシスコ)

港町サンフランシスコ。橋脚の上にエキスポラトリウムがあります。科学館と言えば、ただ眺めるだけではなく、ふれて遊ぶことができるおもちゃのような展示が思い浮かびます。そのような展示の元祖は、実はこちらエキスポラトリウムなのです。世界中の科学館に影響を与えた、パイオニア的存在です。



エキスポラトリウムのコンセプトは、自分自身で体験して、発見すること！ 巨大な倉庫を思わせる館内には、面白そうな展示がずらり。その中には遊びかたや解説のまったくない展示品もあります。100人いれば、100通りの遊び方や発見が生まれることを大事にしているのです。

館内の中心部には工房があり、来館者は中の様子を眺めることができます(左写真)。エキスポラトリウムのすてきな展示たちは、すべてこの工房で生まれ、メンテナンスされているのです(実は大阪市立科学館には、こちらから譲り受けた展示資料があります)。ものづくりが市民に近いところにあるのは、手を動かすことの楽しさを伝えるメッセージにもなっています。

とても興味深いと思ったのは、心理学や行動経済学をテーマとした展示が設けられていたことです。たとえば、2人でそれぞれ蛇口に顔を近づけ、「普通に水を飲んでもらうボタン(青)」か、「水鉄砲を浴びせるボタン(赤)」のどちらかを、お互いに押すゲームです(右写真)。どちらも(青)なら、2人とも水を飲めます。自分は(青)を押したのに相手が(赤)なら、顔に水鉄砲を浴びてしまいます！ どちらも(赤)なら、何も起こりません。裏切り合うよりも協力し合う方がよい結果になるのに、お互いに裏切り合ってしまう「囚人のジレンマ」がテーマです。他にも、ジェンダー、LGBTや人種など、日本では避けて通りがちな話題についてもストレートに扱っており、「科学館」という枠にとどまらず、多様な発見を体験できる空間です。さすが、パイオニア…



4月現在、新型コロナウイルスの流行により、この研修で訪問したいずれの科学館も休館しています。はやく収束することを祈るばかりです。

上羽 貴大(科学館学芸員)